

二年制保育者養成課程における
「保育内容」科目の連携に関する一考察
—学生アンケートと「表現Ⅱ」「図画工作Ⅱ」の
連携授業の実践を中心として—

白川佳子（初等教育学科・准教授）・東ゆかり（初等教育学科・准教授）

A Study of the Relationship among the Subjects Related to “the Contents of Childcare” in the Two-year Training Programs for Childcare Teachers:

Investigation from Students' Questionnaire and Practice of the Relationship between “Expression Ⅱ” and “Arts and Crafts Ⅱ”

Shirakawa, Yoshiko・Azuma, Yukari

Abstract

The purpose of this present study was, firstly, to investigate: (1) the relationship between “Expression Ⅱ” and “Arts and Crafts Ⅱ” (2) what childcare majors at 2-year-college understood the contents of childcare (3) how they exercised the skills and knowledge that they had learned at college in the childcare internship, and then, to discuss the relationship among the subjects related to the contents of childcare. In this study, the subjects were the total of 219 2-year-college students who had responded the questionnaire (189 first grade and 130 second grade students). The contents of each question included such topics as the types of license and qualification that the childcare majors were going to acquire, the period of the childcare internship, their own experience of attending nursery school and kindergarten, their understanding of the contents of childcare, and the relationship between the contents of childcare and the childcare internship. Also, we asked teachers who were in charge of the childcare-related subjects about their classes.

The results were as follows:

Firstly, students thought the meaning of express and expression for children from the relationship between “Expression Ⅱ” and “Arts and Crafts Ⅱ”.

Secondly, approximately 80% of the respondents both in the first and second grades were going to acquire the license and qualification for both kindergarten and nursery school teachers, while approximately 15% of the first grade respondents intended to acquire either of the two.

Lastly, concerning the childcare internship, approximately 90% of the second grade respondents made the childcare plans in the internship. Also, the majority of the plans was aimed at the childcare for 5-year-old children and was connected with such categories as ‘expression’ and ‘human relationship’.

These findings suggested that two-year-college students exercised their skills and knowledge of the contents of childcare. We will reflect these findings into the relationship among the subjects related to the contents of childcare in the further research.

Keywords : two-year training programs for childcare teachers, contents of childcare, relationship among Subjects

キーワード：二年制保育者養成、保育内容、教科目間の連携

問題と目的

近年、大学におけるFD研修による授業改善や教科間の連携の必要性が言われている。特に、二年制保育者養成校においては、2年間という短い修学期間においては、教科間の連携を通した学生の「反芻的学習」が重要となってくる。そのためには、教科目間の相互不干渉ではなく、連携と協働が不可欠であると言われている。また、それぞれの教科目担当者が、教授内容の重複の是非について吟味するなど、専門的な主体として養成のための議論を進め、合意を形成していく必要があり、教員間の協働のあり方がそのまま、組織の一員として協働する保育士のあり方のモデルとなると述べられている（全国保育士養成協議会専門委員会,2007）。そして、養成校教員もまた、望まれる保育士の専門職像を再確認して、学生とともに成長し続ける存在であることが求められているのである（白川,2007）。

本学の二年制保育者養成課程では、保育士資格の他、幼稚園教諭2種免許、小学校教諭2種免許、児童厚生2級指導員、秘書士、レクリエーション・インストラクターなどの6種類の免許・資格が取得可能であるため、学生の立場から考えると複雑で授業時間数が多いという大変さがあるものの、幼保一元化、幼小連携、児童館の機能価値などの教育・保育現場の流れに適した学びをする機会を与えられているとも言える。一方、授業担当者の立場から考えると、受講学生がどのような資格・免許を取得予定であるのかといった把握の困難さや他の教科目でどのような学びをしているのか（してきたのか）という学習状況の把握の困難さがある。しかしながら、受講学生の状況把握ができていなければ、授業において免許・資格と関連させた内容の扱いに明確さを欠いてしまうことにもつながる。例えば、担当科目の授業が保育士資格と幼稚園教諭2種免許の必修科目であったとしても、受講学生の中には、幼稚園教諭2種免許と小学校教諭2種免許を取得予定の学生や保育士資格と児童厚生2級指導員の資格を取得予定の学生も存在するわけである。

本研究では、「保育内容研究」の総論科目と各

論6科目（健康、人間関係、環境、言葉、表現①、表現②）を取り上げ、受講生の実態や教科目間の連携の必要性の是非について考えることを目的としているが、まず、保育内容研究という教科目がどのような位置づけにあるのかを押さえておく必要がある。本学では、この保育内容研究の科目は幼稚園教諭2種免許、保育士資格、児童厚生2級指導員の必修科目として位置づけられている。授業のシラバスを見てみると、授業内容の中に「保育領域」についての記載がみられる。保育領域とは、幼稚園教育要領と保育所保育指針で定義されている5領域、つまり、健康、人間関係、環境、言葉、表現のことをさす。保育内容研究の授業では、保育5領域を扱う際に幼稚園教育要領と保育所保育指針の両方を用いることが一般的であると考えられるが、受講学生の中には、幼稚園教諭2種免許のみ、または、保育士資格のみ取得予定という学生も存在するであろう。そのことによって、自身が取得しない免許や資格に関する授業内容には興味関心が薄れる恐れがある。受講学生における取得予定の免許・資格別の人数や割合を知っておくことは、受講学生の学習意欲を高める授業の教授方法の工夫にも役立つであろう。例えば、幼稚園教諭2種免許と保育士資格の両方を取得しない学生に対しては、認定子ども園などの幼保一元化の流れや幼小連携の重要性を学生に呈示することで、学生自身が取得しない免許・資格に関することの学習に対しても動機付けを高めることができるのではないだろうか。そして、受講学生の取得予定の免許・資格の割合を知ることによって、科目担当者は自身の授業の中でのターゲットを定めやすくなるであろう。そこで、本研究では、学生の実態調査として、取得予定の免許資格や学外実習の時期などを明らかにすることを目的の一つとする。

近年の学生の実態に関しては、学力の面だけでなく、生活経験や社会常識の欠如など「生活力」の不足が問題になっていると言われている。小川（2007）では、人間としての生活力には、衣食住を自己管理できる自立した生活者であるという要素と他者とコミュニケーションをとることができ

るという要素があるとしている。この点に関しての授業での取り組みは、グループワークや演習などが考えられるが、本研究では、学生に対して、小学校就学前に通園していた幼稚園や保育所の保育者と関わった経験や思い出を自由記述で尋ねることとする。学生自身がコミュニケーションをとることが困難な存在であった幼児期に、保育者からどのようなコミュニケーションをしてもらったのかを知ることによって、他者とコミュニケーションをとることの重要性を認識させていくことができる。本研究では、学生に調査結果をフィードバックするところまでは含まれていないが、筆者らの担当授業科目において、幼児期の保育者との思い出をフィードバックすることによって、学生の目指すべき保育者像が明確になっていくことを期待する。

次に、教科目間の連携やシークエンス（配列）について考えてみる。まず、教科目間の連携に関しては、本研究では保育内容研究の総論と各論6科目との連携をみるために、学生と授業担当者へアンケートやインタビュー調査によって、学生の授業・保育領域への理解度や授業担当者が学生の理解度をどのように認識しているのかについて検討する。全国保育士養成協議会専門委員会（2006）は、反省的実践家の学習をモデルとして、「ダブル・ループ学習」が必要であるとしている。言い換えると、複数の教科目の中で繰り返して講義されることによってふりかえって理解し直すなどの「反芻的学習」ができるというのである。この反芻的学習は、授業内容の効率化を図る観点から教科目相互の重複を避けるという考え方とは相反するものであるが、授業担当者が自身の担当科目と関連する教科目の授業内容を把握してこそ、学生の反芻的学習効果も高まると考えられる。本学の場合、1年春semesterに総論、1年秋semesterに各論6科目が開講されているが、本研究では、学生が総論と各論の関連を理解しているのか、授業担当者が総論と各論の関連性について授業の中で扱っているのかについて検討する。教科目のシークエンス（配列）については、保育者養成校においては学外実習を主要軸にした教科目のシーク

エンスがあると思われる。つまり、学外実習前の時期に学ぶ教科目と学外実習後の時期に学ぶ教科目のシークエンスを考慮しながら、担当科目の授業を行っていく必要がある。本学での保育内容研究の総論と各論6科目は、保育所実習・幼稚園実習などの学外実習の前に実施される教科目である。学外実習の意義が、一つは「学んだことを実践して試してみること」であり、もう一つが「学外実習の経験をふりかえりながら、学生自身のこれからの学習課題を見つけ出す」ことではないのかということを本研究では学生アンケート調査を通して明らかにする。また、学生が学外実習後にどのような学習課題を見出したのかについても把握しておく必要があるのではないだろうか。そこで、本研究では、学生に対して、実習前に学んでおいた方がよかったこと（1年生には実習前に学んでおきたいこと）や実習において役立った授業内容について明らかにしたい。

さらに、本研究では、保育に関する教科目間の連携の可能性についても併せて考えてみることにする。福祉系科目においては教科目間の連携についての廣井（2007）の研究や保育内容「環境」の科目の意義については寺島（2007）などの研究があるが、白川ら（2005）の研究では、発達心理学、小児栄養、環境、英語の教科目の連携を総合演習の授業において実践し、対象学生の総合的な学習効果があったという結果が得られた。また、東ら（2003）では、表現と図工の合同授業の実践を行っているが、本研究では、教科目間の連携を通しての学生の学びということに焦点を当て、Ⅲ章において報告する。

Ⅰ. 2年制保育者養成校の学生へのアンケート調査 調査目的

2年制の保育者養成課程において学んでいる学生が、どのような免許や資格を取得予定であるのか、幼稚園や保育所では子ども時代にどのような思い出を持っている学生たちなのかなどについて尋ね、学生の実態を把握することを目的とする。

調査時期である10月は、1年生にとっては、春semesterに保育内容研究「総論」の授業を受け、

これから保育内容研究の各論6科目を受講する時期であり、2年生にとっては、保育内容研究「総論」、「各論」とともに受講し終え、幼稚園や保育所での学外実習もほとんどの学生が終了している時期である。この習得期間に1年間の差がある2学年のグループ間において、授業に関する理解度に差異がみられるのかを分析する。

方 法

1. 調査対象者

鎌倉女子大学短期大学部初等教育学科1年189名、2年130名、合計319名。2年の調査対象者の中に、幼稚園免許と保育士資格をどちらも取得しない学生が8名含まれているが、学生自身の小学校就学前の経験についての質問項目のみ有効回答として分析に用いた。

2. 調査時期および実施方法

2007年10月1日（月）から10月5日（金）の期間に、無記名による質問紙法を実施した。回収率は100%であった。

3. 質問紙の構成

保育内容研究（総論、健康、人間関係、環境、言葉、表現①・②）の科目の理解と学外実習に関する以下の質問項目から成っている。また、学外実習に行く前と後での比較をするため、1年生用と2年生用では質問内容が少し異なったものになっている。①取得予定の免許・資格（多肢選択法）、②実習形態別の実習時期（2年生のみ；記述式）、③学生自身の小学校就学前の通園経験（選択法と自由記述）、④学外実習前の保育内容5領域の理解度（5段階評定）、⑤保育内容研究総論と各論の理解（二者択一法）、⑥保育所および幼稚園実習での指導案作成の有無と指導案の内容（2年生のみ；二者択一法と記述法）、⑦学外実習に行く前に授業で学んで役立ったこと（2年生のみ；自由記述法）、⑧学外実習の前に授業で学んでおきたかったこと（2年生；自由記述法）、学外実習の前に学んでおきたいこと（1年生；自由記述法）、である。

4. 倫理的配慮

調査対象者には、研究目的について説明を行った上で、調査結果については統計的に処理し、個

人が特定されることはないことなどを説明し調査協力の同意を得た。

結果と考察

1. 取得予定の免許・資格

表1には、学生の取得予定の免許資格等の人数と割合を学年ごとに示している。2年生は入学時の在籍数217名中の約60%の130名が回答し、1年生は入学時の在籍数214名中の約88%である189名が回答した。2年生については、幼稚園教諭と小学校教諭の必修科目の授業内でアンケートを実施したため、保育士資格取得見込みの学生からのデータを取ることができなかった。しかしながら、1年生の取得予定の免許・資格の人数割合と比較したところ、ほぼ同割合であったため、サンプルに偏りがないと判断して分析に用いることにする。

表1 取得予定の免許・資格ごとの人数

	1年		2年	
	N	%	N	%
ア. 保育士資格	171	90.48	111	85.38
イ. 幼稚園教諭2種免許	181	95.77	118	90.77
ウ. 小学校教諭2種免許	30	15.87	19	14.62
エ. 児童厚生2級指導員	19	10.05	5	3.85
オ. 秘書士	34	17.99	7	5.38
カ. レクリエーションインストラクター	13	6.88	7	5.38
キ. 免許なし	0	0.00	1	0.77

注) 表中の%は、1年189名、2年130名中に占める割合を示す。

表2には、取得予定の免許・資格の組み合わせごとの学生の人数を示している。最も多い組み合わせが、幼稚園教諭と保育士資格、次に幼稚園教諭と保育士資格にその他の資格を組み合わせたものであり、その2つを合わせると1年生148名(78.3%)、2年生101名(77.7%)と全体の8割近くを占めている。これは、全在籍学生における割合とほぼ同じである。

表2 取得予定の免許・資格の組み合わせごとの人数

	幼稚園出身		保育所出身	
	N	%	N	%
A幼保小・幼保小+α	15	7.94	6	4.62
B幼保+α	39	20.63	14	10.77
C幼保のみ	109	57.67	87	66.92
D幼小・幼小+α	15	7.94	6	4.62
E幼のみ	3	1.59	5	3.85
F保・保+α	8	4.23	4	3.08
G小・小+α	0	0.00	7	5.38
H免許なし	0	0.00	1	0.77
合計	189	100	130	100

2. 実習形態別の実習時期

本調査では、授業での学習と幼稚園・保育所への学外実習との関連を調べることを目的の一つとしているため、調査実施の段階で、学生がどの実習を終了させているのかどうかを把握する必要がある。そのため、実習形態ごとの実習時期を調査した（表3）。表3に示したように、1年次には保育所の1回目の実習と児童厚生施設での実習があり、2年次では保育所の2回目、児童福祉施設、幼稚園、小学校での実習がそれぞれ実施される。調査を実施した日までに幼稚園か保育所に実習に行ったことがある学生は116名おり、これらを学外実習に関する項目に関しての有効回答として分析することにする。

表3 実習形態別の実習時期の人数

	1年次		2年次	
	時期	N	時期	N
保育所	2～3月	107	8～9月	112
施設			5～6月	11
			8～9月	80
			10～11月	17
幼稚園			5～6月	81
			8～9月	2
			10～12月	27
小学校			5～6月	6
			8～9月	1
			10～11月	7
児童厚生施設	12月	4		
	3月	1		

3. 学生自身の小学校就学前の通園経験

学生の小学校就学前の通園経験を尋ねたところ、幼稚園出身者は319名中236名（73.98%）、保育所出身者は56名（17.55%）、その他は27名（8.46%）

でそのほとんどが保育所から幼稚園に転園したというものであった（21名）。次に、出身園別に取得予定の免許・資格の種類をみたものを表4に示す。表4に示したように、幼稚園出身者、保育所出身者ともに取得予定の免許資格が幼稚園免許と保育士資格のみという者が最も多く、その他の免許資格に関しても、両者はほとんど同じ割合であった。出身園の種類によって取得できる免許資格を選ぶというような関連はないようであった。

次に、幼稚園や保育所での保育者との思い出について自由記述で主にあげられたものは、保育園経験者では、「登園の時」「お昼寝で眠れない時」「親のお迎えが遅いとき」「給食を食べるのが遅かった時」など子どもの情緒が安定するような保育者の配慮についてあげられていた。幼稚園経験者でも、保育所と同様、子どもの情緒が安定するように、「泣いていると抱っこしてくれた」「見守ってくれた」「転園で不安なとき優しくしてもらった」「お泊り保育の時眠るまで側にいてもらった」「どんな時も話を聞いてくれて、ちょっとした変化に気づいてくれた」などの保育者としての配慮がみられた。幼稚園独自の自由記述としては、担任の先生に、お絵かき、お手伝い、鉄棒、折り紙、劇などでほめられた経験や卒園後も担任の先生との手紙のやり取りをしていた、幼稚園の先生が好きで憧れていたもので、保育者を目指したという記述が多かった。近年の学生の実態として「生活力」の不足が問題になっているが、生活力の一つの要素である「保育者は他者とのコミュニケーション

表4 学生の出身園と取得予定の免許・資格とのクロス表

	幼稚園出身		保育所出身		その他	
	N	%	N	%	N	%
A幼保小・幼保小+α	15	6.36	2	3.57	4	14.81
B幼保+α	39	16.53	8	14.29	6	22.22
C幼保のみ	144	61.02	42	75.00	10	37.04
D幼小・幼小+α	18	7.63	2	3.57	1	3.70
E幼のみ	8	3.39	0	0.00	0	0.00
F保・保+α	7	2.97	2	3.57	3	11.11
G小・小+α	4	1.69	0	0.00	3	11.11
H免許なし	1	0.42	0	0.00	0	0.00
合計	236	100	56	100	27	100

注) その他の内訳は、保育所→幼稚園21名、幼稚園→保育所2名、託児所等4名であった。表中のαは、児童厚生、秘書士、レクリエーション・インストラクターの資格を示している。

をとることができること」という点に関しては、保育者がコミュニケーションをとることが困難な乳幼児ともコミュニケーションをしようと努力する存在であるという理解を学生が深めていくためにも、学生自身が乳幼児期に保育者とどのようなコミュニケーションをしたのかを回想させていくことが具体的な学びにつながると考えられる。

4. 保育内容研究総論と各論の関係性についての認識

一般的に総論と各論の関連性を述べる際、総論が各論をまとめるものであるという認識がある。本研究では、実際に学生が保育内容研究総論が保育内容研究（健康、人間関係、環境、言葉、表現）の各論科目をまとめる科目であるという認識をもっているのかどうかを調べるため、1年生には春セメスターの総論の授業を受講している時点での認識の有無を、2年生には秋セメスターの各論の授業を受講している時点での認識の有無をそれぞれ尋ねたところ、1年生は189名中93名（49.20%）、2年生は120名中91名（75.83%）が認識していたと答えた（表5）。2年生の方が認識していたと答えた割合が高かったのは、春セメスターに総論だけしか受講していなかった時期よりも、秋セメスターになって各論を受講したことで総論と各論の関連性についての認識が強くなったと考えられる。この結果をもとに、保育内容総論の位置づけがどのようなになっているのかを今後詳細に検討していきたい。

表5 保育5領域についての理解度（5段階評価）

	5 非常に理解 できている	4 かなり理解 できている	3 理解できて いる	2 あまり理解 できていな い	1 全く理解で きていない	合計	(N)
1年生	1.60	2.66	69.68	23.94	2.13	100	(188)
2年生	0.00	11.30	75.65	12.17	0.87	100	(115)

注）表中の数値は%を示す。

5. 保育所および幼稚園実習での指導案作成の有無と指導案の内容（2年生のみ）

調査を実施した期間以前に、幼稚園または保育所に実習に行った学生116名の中で、指導計画を作成した者が105名（90.51%）、作成しなかった者が7名（6.03%）、無回答が4名（3.45%）であった。指導案を作成しなかった者7名の取得予定の免許資格の内訳は、幼稚園教諭と保育士資格のみ5名、幼稚園教諭・保育士資格と児童厚生指導員の資格1名、保育士資格のみ1名であった。調査実施の時

期までに、すべての実習が終了している者は、幼稚園教諭と保育士資格を取得予定の1名と保育士資格のみ取得予定の1名だけであり、他の5名は保育所実習はすでに終わっているが幼稚園実習が10月以降に予定されている学生であった。教育実習指導や保育実習指導の授業の中では、学外実習での責任実習の実施と指導計画の立案をするように学生を指導しているが、実習園の保育所の状況によっては責任実習が実施できない場合もあるのかもしれない。または、実習生が責任実習をさせてもらうよう依頼していないことも考えられる。今回の調査では、指導案を作成しなかった理由までは調べていないが、今後、学生を指導していく際に考慮していく必要があると思われる。

表6 指導計画の対象年齢と関連領域

	保育所実習 (95)		幼稚園実習 (80)	
(N)	N	%	N	%
領域別				
健康	25	26.32	21	26.25
人間関係	52	54.74	51	63.75
環境	34	35.79	38	47.50
言葉	37	38.95	28	35.00
表現	79	83.16	75	93.75
関連付けられない	1	1.05	0	0.00
わからない	4	4.21	4	5.00
領域数	N	%	N	%
5領域	8	8.42	6	7.50
4領域	11	11.58	16	20.00
3領域	21	22.11	21	26.25
2領域	28	29.47	18	22.50
1領域	24	25.26	16	20.00
対象年齢	N	%	N	%
0歳児	3	3.16		
1歳児	7	7.37		
2歳児	18	18.95		
3歳児	22	23.16	13	16.25
4歳児	27	28.42	21	26.25
5歳児	35	36.84	55	68.75

次に、指導計画の対象年齢と保育5領域との関連についてみていくことにする。表6には、保育所での実習と幼稚園での実習ごとに指導計画の対象年齢と保育5領域との関係を示している。表6に示されたように、対象年齢は幼稚園実習、保育所実習ともに5歳児がもっとも多く、次に4歳児、3歳児の順であった。領域別では一つの活動が複数の領域と関連があると回答したものが幼稚園実習で76.25%、保育所実習で71.58%と多かった。複数回答ではあるが、最も多かった領域は、表現（幼稚園93.75%、保育所83.16%）、人間関係（幼稚園

園63.75%、保育所54.74%)であった。この保育5領域との関連付けの質問項目については、学生の主観によるところが大きく、実際は多くの保育領域と関連性があったとしても、その主要な領域名しか選択していないことや、学生が複数の領域との関連性を考えずに指導計画を立てていたことも考えられる。表7-1には領域数ごとの活動テーマ、表7-2には対象年齢ごとの活動テーマを幼稚園実習、保育所実習ごとに示している。同じ活動テーマであっても、領域数が異なるということは、指導計画を立てる際に保育領域との関連性を考えるか否かの違いであるかもしれない。現在は、保育内容の各論の授業はそれぞれ独自に実施されているが、今後、領域間の関連性を授業の中で実践できるような機会を設けていくことが大切ではないかと考えている。また、表7-2の対象年齢ごとの活動のテーマは、筆者が担当している保育実習指導の授業内容にも大いに活用できるデータであるので、今後も幼稚園や保育所の実習が終了した時期に同様の調査を実施していくことは意義のあることであると思われる。

表7-1 指導計画の関連領域数ごとの活動テーマ

領域数	活動テーマ
5 領域	<p><幼>紙コップけん玉、速く飛ぶ紙ヒコウキを作ろう</p> <p><保>絵本、びっくり箱工作、クイズ、集団遊び、製作、ふれあい遊び、パネルシアター、紙コップけん玉、はらぺこ青虫のリズム遊び</p>
4 領域	<p><幼>紙コップけん玉、紙コップマラカス、魚釣り遊び、絵本、七夕飾り、ゲーム、製作、ロケット作り、野菜スタンプ、手遊び、天気予報士ゲーム、宝探しゲーム</p> <p><保>絵本、七夕飾り、ゲーム、紙コップけん玉、紙コップマラカス、魚釣り、製作、天気予報士ゲーム、宝探しゲーム、野菜スタンプ、手遊び、ロケット作り</p>
3 領域	<p><幼>アジサイを作ろう、七夕飾り作り、お天気バスケット、カエル作り、カタツムリ、紙コップけん玉、魚釣り、新聞紙ちぎり遊び、製作、パラシュート作り、ボーリング作り、ボール遊び、ロケット作り</p> <p><保>朝の集い（体操、絵本、手遊び）、色水遊び、絵本、いもむし作り、けん玉作り、手遊び、ひっかき絵、紙コップロケット、魚釣り、しっぽとりゲーム、ドッジボール、しゃぼん玉、しっぽ取りゲーム、製作、ビンゴ、フリスビーをカラフルにしよう、マラカス</p>
2 領域	<p><幼>紙コップを動かそう、紙粘土のキーホルダー作り、けん玉製作、魚釣り、スクラッチ、製作、プーメラン作り、ロケット作り</p> <p><保>絵を描く、おばけコップ製作、折り紙、ゲーム、小麦粉粘土、ゴムパッチン、ジャンケン列車、製作、玉入れ、忍者遊び、パネルシアター、クイズ、ビンゴ、フィンガーペインティングを楽しむ、風車作り、ペープサート、ボール遊び、ボール流せゲーム、音あてゲーム</p>
1 領域	<p><幼>おもちゃの製作、紙コップロケット、スクラッチ、フルーツバスケット</p> <p><保>うちわ作り、折り紙、ゲーム、小麦粉粘土、製作、水遊び、メダル作り、ロケット作り</p>

表7-2 指導計画の対象年齢ごとの活動テーマ

対象年齢	活動テーマ
0 歳児	<保>散歩、はらぺこ青虫のリズム体操
1 歳児	<保>色水、絵本、手遊び、パネルシアター
2 歳児	<保>小麦粉粘土、玉入れ、忍者遊び、フィンガーペインティングを楽しむ、ペープサート、メダル作り、絵本、手遊び、びっくり箱製作
3 歳児	<p><幼>かたつむり、紙粘土のキーホルダー作り、魚釣り、新聞紙ちぎり遊び、あじさい作り</p> <p><保>うちわ作り、ウサギと亀の紙コップレース、絵本、いもむし作り、ゲーム、しゃぼん玉、しっぽ取りゲーム、ジャンケン列車、製作、フリスビーをカラフルにしよう、ボール流せゲーム、音あてゲーム、マラカス</p>
4 歳児	<p><幼>絵本、七夕飾り、ゲーム、紙コップけん玉、製作、天気予報士ゲーム、宝探しゲーム、パラシュート作り、フルーツバスケット</p> <p><保>折り紙、ゴムパッチン、魚釣り、しっぽとりゲーム、ドッジボール、製作、パネルシアター、クイズ、ボール遊び、水遊び、ロケット作り、折り紙でおばけ作り</p>
5 歳児	<p><幼>おもちゃ製作、かえる作り、紙コップけん玉、紙コップマラカス、紙コップロケット、紙コップを動かそう、ゲーム、けん玉製作、魚釣り、スクラッチ、製作、速く飛ぶ紙飛行機を作ろう、プーメラン作り、ボーリング作り、ボール遊び、野菜スタンプ、絵本、手遊び、ロケット作り</p> <p><保>朝の集い（体操、絵本、手遊び）、うちわ作り、絵本、けん玉作り、おばけコップ作り、紙皿フリスビー、クイズ、集団遊び、製作、ビンゴ、風車作り、ひっかき絵</p>

6. 学外実習に行く前に授業で学んで役立ったこと

2年生に対して、学外実習に行って役立った大学の授業内容について尋ねたところ、最も多かった回答が、手遊び、実習日誌・指導計画の書き方、絵本や紙芝居の読み聞かせ、子ども発達についての理解であった（表8-1）。手遊びは保育活動の主題としても導入としてもよく用いられる保育教材であり、保育現場の部分実習や子どもとの遊び場面で学生が自信をもって学習成果を発揮することができたからであろう。実習日誌・指導計画の書き方については、実習指導の授業を始め多くの保育系の授業で扱われており、学生自身も重要性を感じているのではないだろうか。また、絵本や紙芝居の読み聞かせについては、技法を教わるだけでなく、授業の中で学生が発表する機会を与えられたり、宿題として絵本を30冊読んでくるというような課題を与えられることによって、実習において子どもを前にしたときに自信を持って読み聞かせができたという実感を得た学生の意見が多かった。田爪ら（2006）の研究でも、2年制保育者養成課程の1年生に模擬授業を経験させることで保育者アイデンティティの確立に一定の効

果がもたらされることが明らかにされており、学生の中には大勢の前で模擬授業をすることや課題を出されることに抵抗感がある者もいるが、このような実習を終えた先輩たちの意見をこれから実習に行く1年生に伝えていくことで、学習への動機付けを高めることができると考えられる。

表8-1 学外実習で役立った授業内容（2年）

1 手遊び	53
2 実習日誌・指導計画の書き方	48
3 絵本や紙芝居の読み聞かせ	14
4 子どもの発達についての理解	14
5 ピアノ・弾き歌い	8
6 ペープサート・パネルシアター・エプロンシアターの実演	7
7 人前に出て実践したこと	5
8 子どもたちへの言葉かけ	5
9 さまざまな事例	4
10 子どもとのかかわり方	4
11 保育の5領域の内容や役割	4
12 ゲーム	4
13 先輩の実習の体験談	2
14 からだを使った遊び	2
15 バッジ・名札作り	2
16 授業で保育教材を作ったこと	2
17 礼儀	1
18 壁画構成	1
19 図画工作	1
20 実際に保育環境を見たこと	1

表8-2 学外実習についての大学での学習

実習前に学んでおきたかったこと(2年)		N
1 おむつ交換		20
2 指導案の書き方		20
3 手遊び		19
4 障害児		8
5 施設		6
6 ミルクの飲ませ方(調乳)		5
7 製作		5
8 絵本や紙芝居の読み聞かせ		4
9 おんぶや抱っこ仕方		3
10 ゲーム		3
11 ごはんや離乳食の食べさせ方(食事)		3
12 乳児への接し方		2
13 実践的なこと		2
実習前に学んでおきたいこと(1年)		N
1 手遊び		29
2 子どもへの接し方		25
3 さまざまな子どもへの対処法(※1)		21
4 実習日誌・指導案の書き方		20
5 実践的なもの		15
6 子どもの遊び		14
7 ピアノ		13
8 子どもの発達などの知識		12
9 幼稚園や保育所の現状		10
10 保護者とかかわり方		8
11 実習の様子		7
12 コミュニケーションのとり方		5
13 保育者の姿勢や仕事内容		4
14 歌		4
15 工作・製作		3
16 先輩たちの実習の体験談		3
17 礼儀や常識		2
18 折り紙		2
19 絵本や紙芝居の読み聞かせ		2
20 保育5領域		1
21 自己紹介の仕方		1

※その他 気になる子どもについて、子どもへの注意の仕方、子どもの注目を自分に向かせる、一人でいるのが好きな子ども、保育者から離れない子ども、問題のある子ども、泣いた子ども、子どもの喧嘩、子どもに誘われたときの上手な対応の仕方、子どもへの援助の程度

7. 学外実習の前に授業で学んでおきたかったこと (学んでおきたいこと)

1年生に対しては、学外実習の前に学んでおきたいこと、2年生に対しては、学外実習に行く前に学んでおきたかったことは何かと尋ねた。表8-2に示されてように、1年生は学んでおきたいと思う項目が多岐にわたっており、できるだけ多くの内容を学んでおきたいという意欲があらわれた結果であると考えられる。一方、2年生については、学外実習を経験したことで、知識や技能面についての不足感など、学生自身のこれからの学習課題が明確になったのではないだろうか。相浦(2007)では、このような今後の学習課題を明確にすることが実習後の指導では大切なこととして述べられている。学外実習をするにあたって学習の重要性があげられていたものは、おむつの交換、指導案の書き方、手遊びであった。これに関しては、森山ら(2007)でも、おむつの交換、乳児との接し方、ミルクの作り方など乳児に関する事柄が今後の学習目標としてあげられていた。指導案の書き方や手遊びについては、役立ったこととしてもあげられていたが、それでも、さらなる学びの必要性を感じているのであろう。このおむつ交換については、1年生の学外実習までに学んでおきたいことには全くあがっていない。このことから、学外実習を経験していない1年次にはまだ具体的な学習目標ができておらず、学外実習が終了して初めて明確な学習目標を考えることができたのではないだろうか。1年生の意見の中に、先輩たちの実習の体験談が聞きたいというものがあったが、このような調査結果を1年生に伝えていくことで、学外実習までの学習の目標が明確になっていき、受講態度が受動的ではなく能動的になっていくのではないかと考えられる。

Ⅱ. 保育内容の授業担当者への調査

調査目的

保育内容研究の授業担当者が、保育5領域の内容や役割、保育内容の総論と各論の関係性について受講学生がどの程度理解していると認識しているのかを把握し、詳細な授業の内容について調査することを目的としている。

方 法

1. 調査対象者

平成19年度の保育内容研究総論、健康、人間関係、環境、言葉、表現①、表現②の担当者8名。複数の授業担当者でクラスを分担している場合はできる限り複数担当者に調査したが全担当者から回答を得られたわけではない。しかしながら、保育内容総論と各論6科目の計7科目の担当者から回答が得られたため授業担当者への調査主旨を満たしていると見なし、分析に用いた。

2. 調査時期および実施方法

平成19年10月上旬に、授業担当者にインタビューまたは質問用紙に記載していただく形式で回収した。

3. 調査項目の構成

保育内容研究の授業の内容に関する以下の項目から成っている。①学外実習前までの保育内容5領域の内容や役割についての学生の理解（5段階評定）、②保育内容総論が保育内容各論をまとめる科目であることを授業内で扱っているかの有無（二者択一）、③保育5領域の関連性についての授業内での扱いの有無（二者択一）と具体例（自由記述）、④保育内容研究の授業内で扱っている保育教材（複数選択法）、⑤保育内容研究の他科目の授業内容についてのシラバスでの確認の有無（二者択一）、⑥保育内容研究の担当者の打ち合わせの必要性の有無（二者択一）、⑦その他の気づきや意見（自由記述）

4. 倫理的配慮

調査対象者には、研究目的について説明を行った上で、調査結果については、個人が特定されることはないことなどを説明し調査協力の同意を得た。

結果と考察

1. 学外実習前までの保育内容5領域の内容や役割についての学生の理解

学外実習前までに学生がどの程度保育内容5領域の内容や役割を理解していると思うかについて、「非常に理解できている（5）」から「全く理解できていない（1）」までの5段階評定で回答を求めたところ、開講時期が1年春セメスターで

ある科目担当者は、学生が「あまり理解できていない（2）」という回答であったが、1年秋セメスターの開講科目の担当者は「理解できている（3）」「かなり理解できている（4）」という評価であった。このように学生が初めて学外実習を経験する2月までに、ある程度は保育5領域についての理解ができていると授業担当者は評価していることがわかった。

2. 保育内容総論が保育内容各論との関連性について

保育士養成資料集（2007）では、反省的実践家としての保育士の養成に向けた反芻的学習ができることを目標とし、「総論から各論へ、そして総論へ」という流れとなるよう提案している。この提案では、総論Ⅰ（1単位）を1年前期、総論Ⅱ（1単位）を2年後期に配置するというものである。本学では、1年春セメスターに総論が開講され、2年秋セメスターに各論6科目が開講されている。本調査項目では、総論が各論6科目をまとめる科目であることを授業中に説明しているか否かを尋ねたが、担当者8名中半数が説明しているという回答であったが、残りの半数が説明していないとのことであった。確かに、1年春セメスターの時期に、各論を受講していない学生に対して、総論が保育各論6科目をまとめる科目であると説明したとしても、学生は理解できない可能性がある。しかしながら、本学ではまとめの科目としての総論を、各論履修後に配置しているわけではないので、各論の授業の中で総論と各論の関連性を学生に伝えていく必要があるのではないだろうか。保育士養成資料集（2007）でも言及されているように、反芻的復習をすることにより理解し直すきっかけを提供することにつながるので、複数の授業の中で繰り返しや重複があってもよいと考えられる。

3. 保育現場における保育5領域の関連性

保育現場における保育5領域についての関連性について授業の中で扱っているか否かを尋ねたところ、授業担当者8名全員が扱っているという回答であった。授業の中で具体的にどのように扱っているのかを表9に示す。表9に示したように、

それぞれの科目において保育5領域の関連性を説明し、学生の理解を深めるような提示の仕方が工夫されていた。

表9 授業の中で扱っている保育5領域の関連性についての具体例

- ・領域名、領域の生まれ方、考え方、総合的指導の考え方を説明する際に、小学校以上の教科と幼稚園領域の考え方の違い等に関連して説明している。
- ・日案、週案、月案、年間計画など健康に関することを扱っている。保育所保育指針を用いて他の領域も扱っている。
- ・砂場遊びなどの場面を取り上げ、砂場で山、トンネル、溝を仲間で協力し合って作っているのは、人間関係、表現、健康、言葉、環境などの5領域が関わっていることなどを説明している。
- ・領域は5つに分かれているが、独立したものでなく、相互関連性があるから、異なる領域を結びつけて考えていくことで理解が深まるということを説明する。「環境」では特に「表現」や「人間関係」の内容を取り上げながら、共通部分等を示し理解を促すようにしている。
- ・領域とは、視点、観点であると説明している。
- ・具体的に保育内容5領域について説明し、それを元に授業を授業をするということはないが、造形活動を指導する立場になるための必要な要素を提案・説明するなどして、健康、人間関係、環境、言葉、表現の関連性の重要性を指導計画などに生かせるように指導している。
- ・保育所保育指針の中で表現の「内容」と「配慮事項」の中に出てくる「環境」や「言葉」に関する事項、「友だちと一緒に楽しむ」という項目などに見られる「人間関係」につながる部分を特に意識して伝えている。
- ・授業後のフィードバックで、本日の活動目的、他領域との関連を学生に発問する。学生が自ら認識できるようにしている。

4. 保育内容研究の授業内で扱っている保育教材

授業の中でどのような保育教材を扱っておられるのかどうかを、絵本、紙芝居、ペープサート、エプロンシアター、パネルシアター、折り紙、ゲーム、運動遊び、手遊び、その他の中から複数選択してもらったところ、表10に示したように、保育内容各論の全ての科目において、何らかの保育教材が扱われていた。表10には、今回回答が得られなかった授業で扱っている保育教材についても、シラバスに掲載されているものは追加して示した。これらの保育教材については、シラバスに掲載されているものもあるが、授業の内容の欄に

は、教材についてまで詳細にはわからない部分がある。そのため、本調査結果を科目担当者間で共有することによって、教科間の連携を促進できると考えられる。

5. 保育内容研究の他科目の授業内容についてのシラバスでの確認の有無と授業担当者の打ち合わせの必要性

保育内容研究の他科目の授業内容についてシラバスで確認されているかどうかを尋ねたところ、授業担当者8名中7名が確認しているとの回答であった。確認しているという回答の中にも、一部分を見ているだけという回答も数件あり、シラバスでは内容の詳細がわからない部分もあるので、授業担当者間の情報の共有が必要になってくると思われる。この点に関しては、授業担当者に打ち合わせの必要性の有無を尋ねたところ、担当者8名中7名がその必要性を感じていた。しかしながら、担当者の中には常勤教員だけでなく非常勤教員もいるので、全担当者間での打ち合わせの機会はなかなか作ることにはできないのが現状である。しかしながら、打ち合わせに代わるものとして、授業内容の詳細な情報を調査し共有することであってもよいのではないだろうかと考えている。

Ⅲ. 保育者養成校における教科間連携の実践例

1-1. 聖心女子専門学校における授業実践

ここでは、2003年6月12日から3回に渡って実施された「表現」と「図工」の合同授業を紹介する。なお、本授業は聖心女子専門学校授業実践記録(2003)としてビデオ資料であるため、論文としては未発表のものである。

表10 保育内容各論の授業で扱っている保育教材

健康	運動遊び、その他(歯磨きや健康診断など健康に関する内容を扱っている。)
人間関係	その他(靴下パペット、子どもの製作物のアイスクリームなどを見せて、ごっこ遊びの中で人間関係が育まれることなどを説明している。)
環境	絵本、紙芝居、ペープサート、エプロンシアター、パネルシアター、折り紙(絵本以外については紹介のみで技術的なことはしていない。)
言葉	絵本、紙芝居、ペープサート、エプロンシアター、パネルシアター、ゲーム(声で紙芝居メージしてみる)、運動遊び、手遊び、その他(手袋人形、ワークショップ、素話、口演)
表現①	絵本、折り紙、その他(実際に子どもが製作した作品や絵など)
表現②	音楽と合わせた活動として、絵本、紙芝居、ペープサート、エプロンシアター、パネルシアター、ゲーム(言葉とリズムビート、ボールやスカーフを使っの遊び)、運動遊び(なわとび、バンブーダンス)、手遊び、その他(あそび歌、その他コード伴奏、紙芝居イメージ)

実施日時：

【第1回】2003年6月12日 2限(90分) + 4限(90分)「音の造形」(その1)

【第2回】6月19日 2限(90分) + 4限(90分)「音の造形」(その2)

【第3回】6月26日 4限(90分) 日案・指導案の作成

場 所：聖心女子専門学校 13番ホール

対 象 者：2年生後半グループ(Bクラス31名)

(前半のAクラスは後期10月の16日、23日、30日の1限と4限に同一プログラムで実施されたが、今回は後半のBクラスのみを報告する。)

授業担当者：

表現Ⅱ担当2名(専任教員1名〔専門は音楽〕と非常勤講師1名〔専門は保育学〕)

図工Ⅱ担当1名(非常勤講師1名〔専門は造形〕)

聖心女子専門学校では2003年度のカリキュラムの中で、2年ABクラスについて、「図工Ⅱ」(通年、90分、卒必、幼免必修、保育士必修)と「表現Ⅱ」(半期、90分、卒必、幼免必修、保育士必修)が開講されていた(資料1-1、資料1-2)。

通常の授業では、「図工Ⅱ」を造形が専門の非常勤講師が一人で担当し、「表現Ⅱ」は音楽が専門の専任教員1名と保育学が専門の非常勤講師1名で理論と実践を絡めたかたちでの共同授業(2名が毎時間そろって授業をおこなう形態)でおこなわれていた。なお、2年後には、この「表現Ⅱ」は、音楽(専任)、造形(非常勤)、演劇(非常勤)、幼児音楽(非常勤)の4名の共同授業(4名が毎時間そろって授業をおこなう形態)へとさらに発展されていったことを付け加えておく。

授業は、クラスが出席番号順でABの2つのクラスに分割され、それぞれの授業時間帯の裏で異なる授業が同時開講される形態がとられていた。具体的には、以下のとおりである。

前期・木曜日

1限：Aクラス「言葉」 Bクラス「図工Ⅱ」

2限：Bクラス「言葉」 Aクラス「図工Ⅱ」

4限：Aクラス「表現Ⅰ」 Bクラス「表現Ⅱ」

今回の報告では、前期のBクラスの1限「図工Ⅱ」と4限「表現Ⅱ」の合同授業のみを報告することにする。今回の試みは、保育内容「表現」と

資料1-1 保育内容「表現Ⅱ」のシラバスの内容

<授業概要>

保育の場において、子どもたちこそ表現する主役です。保育者は、子どもたちの表現を支える役割を担います。本科目では、豊かな表現のための多様な援助について考えることを目的とします。また、子どもにとっての表現のみならず、保育者自身の表現する力について、理論と実技の両面から取り

<授業計画>

ある幼稚園の5歳児の子どもたちが、行事に向けて活動していく過程をとらえたビデオ教材(授業者撮影による)を用いて、子どもたちの表現活動や援助について掘り下げて考えていきます。

- ・行事における子どもたちの表現
- ・グループごとの活動の展開
- ・保育者の援助-言葉かけに注目して
- ・集団で表現する楽しさ、むずかしさ
- ・自己発揮できない子どもの発見
- ・表現したい気持ちを支える保育者の「引き出し」
- ・保育所保育指針、幼稚園教育要領にみる「保育内容 表現」など

資料1-2 図画工作「Ⅱ」のシラバスの内容

<授業概要>

幼児期における「描いたり、つくったり」という活動は、大人の考える「美術の表現」とは目的が違います。子どもはいろいろな素材の技法との出会いの中で、楽しんだり、困ったり、考えたり、と心や身体をいっぱいに使って関わり、そのことがとても大事な栄養となります。この授業では、「子どもの育ちを助ける造形活動」というテーマで、保育士に求められる造形の基本中の基本を扱います。

<授業計画> ※前期のみ掲載

- ・オリエンテーション
- ・紙について
- ・絵の具について
- ・クレヨン、クレパス、ペン類について
- ・粘土について
- ・色について

※今回の合同授業は、空間に音をつくる、という活動を通して、素材に働きかけて発見する(気付く)という造形の考え方を音楽的活動に融合させ、試行錯誤することの意味を考えることに主眼を置いた。

基礎技能科目の「図工」を連携させることで、幼児の表現活動を支える保育者の視点の確立、基礎技能科目で学んだ技術を表現活動に活かす方法や具体例の提示、それを用いた日案や指導案の作成、などを目的としておこなわれた。

1-2. 合同授業の流れについて～「音の造形」～

幼児が音楽に出会う以前に大切な、「音」についての気づきを促す活動として「音さがし」を体験するという授業プランを立てた。以下、順を追って合同授業の流れについて述べていく。

(1) 授業に使用する道具の事前準備

(今回は授業担当者が全ておこなった)

①いろいろな音の出る道具を用意する。

(スチール管、塩ビ管、発砲スチロール、ステンレス製のボール、石、ビーズ、マレット、ドラムスティック、大太鼓のバチ、など)

②授業内容を記録するための授業ノートを作成し、全員に配布する。この授業ノートは、学生の学習内容を把握するため、授業終了後に提出させた。

(2) 授業の流れ (写真1)



写真1 色んなバチを使って発砲スチロールをたたき、「音探し」をしている様子

【第1回】2003年6月12日(木) ビデオ撮影担当：

表現Ⅱ担当の非常勤講師

- 1) 造形の考え方について (図工Ⅱ担当の非常勤講師)
- 2) 音のしくみについて (表現Ⅱ担当の専任講師)

- 3) 音探し (二人一組になっていろいろなバチを使って発砲スチロールをたたく)
- 4) 一組ずつ発表
- 5) バチを持って部屋中を歩き回り、いろいろな所をたたいてみる
- 6) 発砲スチロールの置き方によって鳴る音に違いがあることを発見する
- 7) 発砲スチロールで1番大きい音と1番小さい音を出してみる
- 8) 4人グループで発砲スチロールによるアンサンブル
- 9) 鑑賞の時間『サヌカイトー讃岐地方の石』の音をCDで聴く
- 10) スチール管をバチでたたく (1番よく響く場所を探す)
- 11) 音を鳴らしたスチール管をバケツの水につけて振動を確認する
- 12) まとめ

【第2回】2003年6月19日(木) ビデオ撮影担当：

表現Ⅱ担当の非常勤講師

- 1) こどもの造形について (図工Ⅱ担当の非常勤講師)
- 2) 2mの塩ビ管を持って、どのような音の鳴らし方があるか試してみる (バチでたたく、吹いてみる、2本の塩ビ管を打ち合う、塩ビ管の先を手のひらでたたく、など)
- 3) 鉄ノコを使って塩ビ管をカットする (二人一組で作業する。音の高低をつけるために長さを変えてカットする)
- 4) 鑑賞の時間『フロムスクラッチーニュージーランドの打楽器グループ』のビデオを見る。
- 5) 音の出し方について、オーケストラの楽器とその奏法から考える (表現Ⅱ担当の専任教員)
- 6) 参考図書の紹介「世界楽器入門～好きな音・嫌いな音～」郡司すみ著 朝日選書
- 7) 用意されているいろいろな道具から好きなものを選んで、それぞれの音を出してみる

- 8) 4～5人のグループでいろいろな道具を使
ってのリズムアンサンブル
9) 発表会（まとめにかえて）

【第3回】2003年6月26日（木）

表現Ⅱ担当の非常勤講師の指導により、日案
と「音さがし」の活動の指導案の作成

（後日、表現Ⅱ担当の非常勤講師による個別
指導をおこなう）

1－3. 合同授業を通しての学生の学び

合同授業を行った後、学生に対して自由記述によ
るアンケート調査を実施した。自由記述としてあが
った学生の学びを資料2-1と資料2-2に示す。

資料2-1には、「音さがし」の活動を振り返って
学生の気づいたこととしてあげられた自由記述を示
しているが、ここでは、音楽以前の音そのものへの
発見や驚きが多数述べられている。これは、本授業

が、保育所保育指針の中にある「様々なものの音、
色、形、手ざわり、動きなどに気づき、驚いたり感
動したりする」子どもの気持ちに共感できる保育者にな
るための、保育者自身の感性を磨く一つの経験の
場となったことを表していると思われる。

資料2-2には、「表現する」ことについて自由
記述であげられた学生の考えを示しているが、こ
の活動を通して、「表現することの意味」や「子ど
もにとっての表現」について、各自が掘り下げて
考える機会になったことを表していると思われる。
また、「言葉」「環境」「人間関係」など他の領域と
「表現」が1つの活動の中で切り離せない密接な関
わりを持つものであることも実感できた。

1－4. 合同授業のまとめ

今回の合同授業を通して最も意義深かったと思
われる点は、共に表現の領域でありながら、養成
課程でそれぞれ単独で展開される「音楽」と「図

資料2-1 「音さがし」の活動を振り返って学生の気づいたこと（自由記述）

- ・行動してみても試行錯誤することがとても大切なことだと思った。
- ・叩く場所や持ち方、位置などを変えると、音は全く違って出てくることがわかった。
- ・自分はどのような響きの音が好きなのか、好きじゃないのか、周りはどうなのかということを知ることができたように思う。
- ・音をさがすということは、新しい世界に一步踏み出すことであり、経験することでもあると思う。音だけでなく、同時に目には見えない何かを感じることができると思う。
- ・鉄のパイプをバチで叩いて水につけると水が揺れるのを見て驚いた。
- ・塩ビ管をバチで叩いたり振ったりしているうちに、端を手の平で叩くと音が出ることを発見した時は驚いた。
- ・音をさがす活動は、人がやっているのを見ていただけではわからず、実際に自分もやってみることが大切であると思った。
- ・子ども達が自分で選び、決めるといったことも必要なのだと感じた。
- ・形式を教えるのではなく、やりたい気持ちを育て、子ども達が自分で考えることを身につけられるよう、大人は見守ることも必要だと気づいた。
- ・用意された素材（音を出すもの）の中から自分で選んで自由に音を出してみることはとても興味深かった。
- ・大人は、だいたい、材料を見るとこんな音だろうと予想がつくが、子ども達は初めて見る物もあるだろうし、そこからすぐにどんな音がでるか想像出来ないかもしれない。その時は保育者が声をかけたり一緒に音を出したりしていけば良いと思った。
- ・子どもだったら、私達が考えつかない音を発見するかもしれないと思った。

資料2-2 「表現する」ことについての学生の考え（自由記述）

- ・表現することに決まりはなく、自由な発想でチャレンジすることがとても大切だと思った。そして、表現することについては、危ないこと（耳で大きな音を出さないなど）はしっかり確認した上で成り立つものだった。
- ・子ども達がどれだけ自由に表現することができるかは保育士の力量によっても変わると思った。
- ・豊かな感性を持ち、子ども達に声かけができるように心がけたいと思った。
- ・ただ活動するのではなく、体験から言葉を使い経験にできるようにすることが大切だと思った。
- ・自分の今までの経験を生かして、自分を表現することなのだと思う。
- ・自分がであった素材そのものに対し、興味を持ち、工夫をし、集中することでそのものの良さが自分自身の力により何倍にも良くなる。そういうことがとても嬉しいと思うし、嬉しいからまたやってみようという気持ち生まれるのだと思った。
- ・表現とは意志であり、自分で決めることだと思う。納得するまで試していく。意志とは、見る力、聞く力を育て、たくさん経験・体験することが必要で、経験は言葉によって思い出され、考えることができる。
- ・表現することは、その人本人を表すものだと思う。
- ・子どもが表現したくなるように、保育者が一緒に喜んだり、驚いたり発見し、その感情が肯定できるようにしてあげることが大切で、子どもの表現意欲を引き出すのだと思う。
- ・体験をたくさんさせてあげて、その子の中に経験をたくさん積み重ねてあげることがとても大切だと思った。また、その子が自分を表現できる安心できる落ち着いた環境を整えてあげることも大切なのではないかと考えた。
- ・子どもがどのように表現したらよいか行き詰まった時に、保育者の一言で表現できるようになった、などのような援助ができたらいと思った。
- ・表現するにあたっては、間違いもなければ正しいもない。その子どもが自分で考えて表現したことは、その子の個性として受け入れることだと思った。一人一人の表現を大切に、人と同じではなく、自分の表現ができることが大切だと思った。
- ・自由に表現できるような空間や材料、題材などを十分準備し、子どもが活動したいと思える環境作りをすることがとても大切だと思った。

工」という教科目について、基礎技能科目としての範疇を越えて、「表現することの意味」、そして「子どもにとっての表現とは何か」ということを学生自身が体験から学ぶことができたことにあ
る。とかく技術の向上にウエートが置かれがちな基礎技能科目では、作ったり、演奏したりといった行為そのものや、その出来栄に意識が向きやすいが、子ども、とりわけ、幼児の表現活動を支える保育者の養成課程においては、このような学びの機会は重要であると考え

総合考察

本研究では、2年制の保育者養成課程の学生の目指している免許・資格についての実態を把握し、保育内容研究の授業と学外実習との関連性などについて分析、検討を行った。また、保育内容研究の授業担当者が、学生の保育5領域への理解度をどのように認識しているのか、授業内容の詳細、保育内容科目の連携の必要性の有無についても検討した。さらに、保育内容「表現Ⅱ」と「図画工作Ⅱ」の合同授業の実践事例を取り上げ、各授業の枠を超えたことで学生にどのような学びがあったのかを学生の授業レポートなどから分析した。ここでは、本研究の結果から以下の3つの点について総合的に考察する。

1. 受講学生の取得予定の免許や資格についての実態の把握

本学の2年制保育者養成課程では、幼稚園教諭2種免許、保育士資格、小学校教諭2種免許、児童厚生2級指導員、秘書士、レクリエーション・インストラクターの6種類の免許・資格が取得可能であり、どの免許・資格を取得するかは学生自身の自主的な選択に任せられている。そのため、取得予定の免許・資格の組み合わせは様々である。本調査は幼稚園教諭2種免許、保育士資格、児童厚生2級指導員の資格の必修科目になっている保育内容研究の授業受講者対象に実施したが、幼免と保育士資格のどちらか一方しか取得しない学生も15%おり、そのような学生の実態も把握した上で授業内容を伝えていく必要があると思われる。

2. 保育内容研究の授業と学外実習の関連

幼稚園か保育所に実習に行った学生の約9割が指導計画を立てた経験があり、対処年齢は5歳児対象が最も多く、活動の内容と保育5領域の関連では表現や人間関係との関連が最も多かった。また、学外実習に行く前に学んでおいた方がよかったものとして2年生があげた項目の中には、1年生が学外実習に行くまでに学んでおきたいものとしてあげた項目の中には全くなかった「おしめの交換」「ミルクの飲ませ方」「離乳食の食べさせ方」など乳児に関する項目があがっていた。このことから、2年生は学外実習の経験を通して、自分自身の学習課題が明確になったと考えられる。この2年生の学習課題や学外実習で役立った授業内容を学外実習未経験の1年生に伝えていくことで、1年生の学外実習に向けての授業の学び方がより意識付けされるのではないだろうか。

3. 保育内容研究の教科目間の連携の必要性

保育内容研究の教科目間の連携の必要性については、ほとんどの担当者が必要性を感じていた。本研究では、受講学生の総合的な学習効果が高まったという「表現Ⅱ」と「図画工作Ⅱ」の合同授業の実践例をあげた。筆者らが考える教科目間の連携の必要性の目的は、教科目相互の重複を避けるというものではなく、教授内容の一部が別の教科目の中で繰り返して解説されることによって学生の反芻的な学習が促進されることである。ただし、お互いの授業内容の把握ができていなければ、他科目で学んだことを自身の担当科目で効果的に取り扱うことができない。教科目間の連携は定期的な担当者会議だけを指しているのではなく、それぞれの授業内容の共有化であるので、本研究の結果などを共有することができれば連携しているとみなすことができるのではないだろうか。

今後は、保育内容研究の複数の教科目において、学生が総合的に学習ができるような授業実践を行っていきたいと考えている。

引用文献

相浦雅子・高濱正文・原孝成・野中千都・那須信樹 2007 全国保育士養成協議会第46回研究大

会発表論文集 78-79.

東ゆかり・志村聡子・山崎優 2003 音の造形 聖心
女子大学専門学校授業実践記録 (ビデオ)

廣井雄一・石川清明 2007 保育士養成における福祉
系科目の相互関連について 全国保育士養成
協議会第46回研究大会発表論文集 50-51.

森山禎也・宮崎正則・佐竹要平・吉田美恵子・松
本千尋 2007 全国保育士養成協議会第46回研
究大会発表論文集 74-75.

小川清美 2007 今、保育者養成で求められている
こと 幼児の教育 2007 年 1 月号 8-13.

白川佳子 2005 保育領域におけるFD研究—発達心
理学、小児栄養、環境、英語を通して— 長
崎短期大学研究紀要第17号 63-74.

白川佳子 2007 保育士養成システムのパラダイム
変換—新たな専門職像の視点から—につい
ての書評 保育士養成研究第24号 33-36.

田爪宏二・小泉裕子 2006 保育者志望学生の「保
育者アイデンティティ」確立に関する検討—
模擬授業の実践を通して— 鎌倉女子大学紀
要第13号 27-38.

寺島明子 保育養成における保育内容環境に関する
科目の意義とそのあり方 (1) 全国保育士養
成協議会第46回研究大会発表論文集 142-143.

全国保育士養成協議会専門委員会 2006 保育士養
成システムのパラダイム転換—新たな専門職
像の視点から— 保育士養成資料集第 44 号

全国保育士養成協議会専門委員会 2007 保育士養成
システムのパラダイム転換—養成課程のシーク
エンスの検討— 保育士養成資料集第46号

っての表現を考える機会になっていた。

2) 1 年生、2 年生の約80%以上が幼稚園教諭と
保育士資格の両方を取得予定であるが、1 年
生では幼稚園か保育士資格のどちらかしか取
得しない学生も約15%いた。

3) 学外実習では約90%の学生が実習計画を作成
していた。そして、幼稚園・保育園実習とも
に5歳児対象の指導計画が最も多く、「表現」
や「人間関係」の領域に関する計画を立てた
という回答が多かった。

本研究の結果から、学生たちが学外実習におけ
る指導計画の中に保育5領域の連携を実感してい
ることがわかった。今後は、これらの結果を生か
し、学生の実態に即した教科目間の連携を考えて
いきたい。

要旨

本研究では、表現Ⅱと図画工作Ⅱの授業連携の
実践報告と保育系短大生へのアンケートを通し
て、保育内容に関する教科目の連携についての可
能性を考察することを目的とする。

アンケートの調査協力者は、2 年生保育者養成
課程の1 年生189名、2 年生130名、合計219名で
あった。調査項目は、取得予定の免許資格、実習
の時期、小学校就学前の幼稚園および保育園の通
園経験、保育5領域についての理解、学外実習と
保育5領域の関連性などについてである。さらに、
保育内容に関する授業担当者に対して、授業に関
することを調査した。

(2007.10.25受稿)

【謝辞】

保育内容研究の授業担当者の方々には、ご多忙
の中、インタビューおよびアンケート調査にご協
力いただきまして、誠にありがとうございました。
本研究の結果が、授業内容や学生指導に少しでも
貢献できれば幸いに存じます。

主な結果は以下の通りである。

1) 表現Ⅱと図画工作Ⅱの連携の実践授業を通し
て、学生は表現することの意味や子どもにと